



◆大学図書館問題研究会京都ワンディセミナーのご案内◆

テーマ 「ILL 業務の事例報告」

日 時：2005年5月14日（土）13:30-16:50(受付 午後1時15分から)

場 所：キャンパスプラザ京都 2階 第2会議室

京都市下京区西洞院通塩小路下る

(JR 京都駅ビル前・京都中央郵便局西側) TEL:075-353-9120

<http://www.consortium.or.jp/campusplaza/index.html>

主 催：大学図書館問題研究会京都支部

参加費：無料

プログラム：

- 13:15- 受付開始
- 13:30-13:40 開会のあいさつ
- 13:40-14:20 「立命館大学における ILL の現状と今後」
井上雅人氏（立命館大学図書館）
- 14:20-15:00 「京都大学附属図書館における ILL 業務の現状」
大網浩一氏（京都大学附属図書館）
- 15:00-15:20 休憩
- 15:20-16:00 「海外 ILL のすすめ」
大網浩一氏（京都大学附属図書館）
- 16:00-16:30 質疑応答
- 16:30-16:40 閉会のあいさつ

※ 終了後、懇親会を予定しています。

※大図研の会員でない方のご参加もお待ちしています。

※申込方法および会場周辺の地図については、2ページをご覧ください。

[目 次]

「京都ワンディセミナー」のご案内	...	1
「図書館職員を対象とした講演会」の参加報告	...	2
支部委員の挨拶	...	4

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm

◆京都ワンディセミナー申込方法

(1)氏名、(2)所属、(3)懇親会参加の有無を記入の上、次のいずれかの方法でお申込み下さい。

1. Web ページでのお申込み

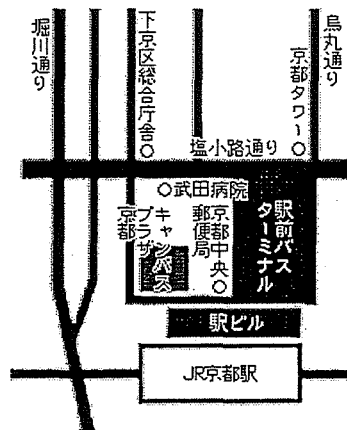
<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/news/seminar20050514sat.html>

2. FAX、メールでのお申込み

支部委員 赤澤久弥 (滋賀医科大学附属図書館) まで

(連絡先) TEL : 077-548-2080 FAX : 077-543-9236

E-mail : akazawa@belle.shiga-med.ac.jp

◆会場周辺の地図 (<http://www.consortium.or.jp/campusplaza/index.html>)

「図書館職員を対象とした講演会」の参加報告

大館 和郎

図書館ネットワークの構築と大学図書館の市民開放の検討に向けて図書館職員を対象とした講演会が大学コンソーシアム京都 (図書館共同事業検討委員会) によって 2005 年 3 月 9 日に同志社大学寒梅館において開催され、これに参加した。プログラムは前半の二つの講演と後半のパネルディスカッションからなり、最初に同志社大学の井上真琴氏が「利用者として大学図書館に望むこと」と題した講演をおこなわれた。昨年刊行された著書の『図書館に訊け!』(ちくま新書)を執筆するにいたった動機として、利用者の視点から一般向けの図書館活用法を書いてほしいという出版社からの要望があったことを挙げられた。実際の利用者(図書館情報学の研究者も含めて)が大学図書館を十分に使いこなしていないという実態を把握したうえで、図書館員が利用者を資料にうまく水先案内できるように研究し、工夫する必要があると提起された。図書館の運営が図書館の論理で組み立てられているために利用しにくいという指摘は耳にいたい。例えば、大学図書館の Web サイトでは「OPAC」という言葉がよく表示されているが、その用語の意味するところがどれほど利用者に伝わるのだろうか。私自身はこの言葉をそのままのかたちで利用者を使うこ

とに抵抗がある。

続いて、前京都府立図書館長の中里隆憲氏が「今、大学図書館に期待すること」(公共図書館から見た大学図書館)と題した講演を行った。現在、京都府下の公共図書館はネットワークで結ばれており、連絡協力車が週一回、府内の全市町村を巡回して相互貸借資料を運搬していること、大学図書館との連携は京都学園大学図書館のみが参加しているだけであること、一般市民が学術資料を利用するためには、大学図書館の参加がもっと増えてほしいことなどを述べられた。それならば、設置母体が同じ京都府立大学や京都府立医科大学図書館との連携からまず手をつけたいと思うのだが、まだ実現していない状況を見ても、いったい本気で取り組むつもりがあるのだろうか疑問に感じた。

プログラムの後半では、まず佛教大学図書館瀬澤氏による「大学コンソーシアム京都共通閲覧事業の取り組み」についての報告があった。本事業の目的として加盟大学の相互利用環境の構築、市民にとっての有効な相互利用体制の構築が挙げられている。今後の具体的な活動としては、2005年度より、加盟大学間で原則として身分証(学生証・教職員証)による利用の一部運用を開始が予定されていることを報告された。さらに実務者レベルでの図書館職員の交流、図書館職員の知識・知恵のネットワーク構築、共同保管書庫の実現と市民への開放を構想中ということが明らかにされた。最後の共同保管書庫の一般利用は実現すれば画期的な事業だが、具体的なことはそれ以上聞けなかった。

続いて、京都精華大学情報館松谷昌順館長による「市民開放への取り組み」と題した京都精華大学情報館の事例報告があった。学外者の利用条件は、各種資料の閲覧・視聴のみできる当日閲覧と学生と同等な条件で貸出も可能な利用者登録(登録料1,000円で3年間有効な利用証発行)の2種類があり、気軽に利用できる仕組みになっている。このうち、申請書に氏名・電話番号を記入するだけで当日利用証が発行される当日閲覧の制度は、単発的な調べものがある図書館を一日だけ利用したいという利用者にとって便利である。アカデミズム色を抑えた敷居の低さは公共図書館の感覚に近いかも知れない。雑誌の貸出をしているのも公共図書館と似ている。

この後、パネル討議に入ったが、一般公開をしている大学図書館についての情報が他大学の図書館員にもよく知られていなかったという一面がうかがわれる内容だった。同じ図書館員の間でも、一般公開の情報の共有ができていないのだから、一般市民にとって大学図書館はまだまだ敷居が高いものと想像できる。最近読んだ『自分で調べる技術——市民のための調査入門』(宮内泰介、2004、岩波アクティブ新書)という本では、一般市民が調査・研究するための文献・情報収集法が述べられているが、その中で、「県立図書館や大学図書館は“調べるための図書”を多く置いています。大学図書館というと大学関係者しか使えないイメージがありますが、実は最近多くの大学図書館は市民に開放されています(解放されていなければ、ぜひ開放するよう大学へ要望しましょう)。(p.42)と書かれているように大学図書館が所蔵している学術資料・情報へのニーズは高いものと予想される。

今回の講演会の参加者は、大学コンソーシアム京都加盟大学図書館職員、京都府立図書館職員、京都市立図書館職員、近畿地区等大学図書館職員からなり、お互いが意見交流できる良い機会であったが、講演会とパネル討議というかたちであったので、自由な意見交換という点ではやや物足りなかったが、企画自体は面白いと思った。

おおだて かずお(京都学園大学図書館)

支部委員の挨拶

■赤澤 久弥 (研究企画 / HP と ML / 組織・財政)

今、自ら「アンテナ」を張ることさえ怠らなければ、様々なメディア、たとえば、ネットを介して得ることのできる情報は、たくさんあります。けれど、直接に人と会って話を聞くこと、そしてその「場」でのやり取りの中でしか、得ることができないものが変わらずにあるのは、もちろんのことです。

そこで、大図研京都支部が、セミナーなどの企画を通して、図書館に関わる方々、図書館に関心のある皆さまにとって、職種や立場を超えた交流の「場」を提供できたら、と思っています。そしてそれが、図書館をよりよく変えていけるきっかけを見つけられる「場」になれば、もっといいなと思います。

さて、そのような「場」は、自然にできるものではありません。それは、会員の皆さまからいただくご意見や実際のご参加によってこそ、成り立つものではないでしょうか。ここで最初の「アンテナ」から、大図研の企画のコピーを勝手に考えてみました。

「みなさまのアンテナ、みなさまがアンテナ」。

京都支部では、会員の皆さまのご意見とご参加をお待ちしております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

あかざわ ひさや (滋賀医科大学附属図書館)

■進藤 達郎 (支部報編集 / 企画)

支部報の編集と、企画の担当をしております進藤です。

3月までは、京都大学の物理系図書室にいました。この4月より、滋賀大学附属図書館の教育学部分館で仕事をしています。まずは支部報の編集について、あまりうまく行っておらず、支部報の刊行が大変不定期になっており申しわけありません。私事に労力を割いているうちに支部委員としての仕事がおろそかになっており、みなさまにご迷惑をおかけしてしまい反省する次第です。企画・編集ともに、支部会員のみなさまにとって貴重な学習や交流の機会となる大切な仕事だと思っています。職場の環境が変わったのにあわせて、少しでもよい成果を出せるよう、気持ちを新たにしがんばって行きたいと思っています。

今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

しんとう たつろう (滋賀大学附属図書館教育学部分館)